

「通り」の経験を共有する
-時間をもった反復についての考察-

16RA202 和泉 美子
指導教員 藤原 徹平 准教授

0.はじめに

「通り」を歩いていると、様々な場面に出会う。その1つ1つは刻々と変化する日常の一場面に過ぎないが、全体に1つの大きな世界を感じさせる。そしてそこを歩く私も、場面場面の登場人物も、その1つの世界を共有しているような感覚がある。私はこの「通り」の経験が他にはない特別なものだと感じている。

しかし、現在身の回りにある道はほとんどが通路(path)であり、通り(street)ではない。「通り」が持つこの特別な経験を考えたい。

1.背景

1-1.背景1:「通り」を考える必要性

建築と都市を結ぶものとして「通り」がある。私たちは、都市を経験するときにも、建築を経験するときにも、必ず「通り」を経験している。つまり、建築を考える上で「通り」は無視できない存在である。具体的に、建築と「通り」の関係として次の2点を挙げる。

i. 「通り」は建築によって存在させられている

「通り」はそれ自体で存在しているのではなく、建築が並んで(反復して)周辺の外形が縁取られることによるのみ、浮かび上がるものである。「通り」は建築がつくる以外には存在できないのだ。

ii. 建築に隣接する外部空間

一方で、建築は道に接続して建てられる。建築にとって「通り」は最も身近な外部空間なのだ。以前は内部の生活空間の延長として道を利用した建築群による「通り」が多くあったが、現在ではほとんどがpathとして抽象化され、その分生活空間も豊かさを失った。

以上から、建築と「通り」は一緒に考えられるべきものであるし、建築と「通り」を有機的に結びつけることが、豊かな都市体験をつくることにもつながる。

1-2.経験の共有から浮かび上がる世界への興味

住んでいるまちの地図を描くことは難しい。人はそれぞれの経験を通じてそのまちを捉えていることが多く、描かれる地図はその経験により異なってくる。もしその地図が人によって全くバラバラならば、同じまちに暮らしていると言えるだろうか。

ある印象的な、絶対的な経験を持つ場所では、それは皆に共有される経験、記憶となり、皆の地図に現れる。そしてそこに真の都市の姿があるのではないかと考える。経験が共有されることが必要だと思う。

2.目的:反復から「通り」を考える

多様な変化を持つ「通り」がどのようにつくられるのか、そしてその経験がどのように共有されるのかを建築と「通り」を一体的に考察する。そのために、建築が並ぶことでつくられる「通り」が持つ、「反復」の性質に着目する。変化は反復があることによって始めて感じられるものであるから、反復に着目することで多様さについても考えることができる。

3.研究1:「通り」における物質の反復

3-1.同質性の反復

建築(=物質)の反復が「通り」の基本的な性質であり、そこから変化とその経験の共有を考える。

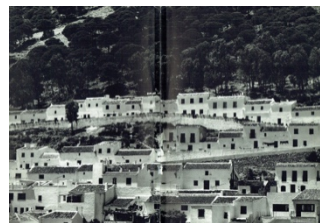


図1.イソロジーの反復



図2.何を見るか人による

ヨーロッパに見られる石造りの街並みや、げた履住戸が並ぶ商店街には、強い「通り」の性格が現れる。

このように同じ形式、同じ素材など「同じである」ことで捉えられるものが並ぶものは、イソロジー(同質性)の反復として考えることができる。イソロジーの反復は連続体として捉えやすく、経験が共有されやすい。

3-2.イソロジーの反復の中での変化の発生

同質なものには同一なものではなく、すべては相似の関係にある。そしてそれが反復することによって、そこにある小さな違いが浮き彫りになり変化を感じる。

それでは、その違いは何によって起こるのか。その1つには、周辺の小さな環境の差に細かく呼応すること、様々な主体が参加することが挙げられるのではないか。例えば、「通り」に対して家々が縁側、軒、植栽などによって中間領域をつくるという関係性は同じままに反復していても、異なる主体がそれぞれの持つ敷地に合わせてそれを変形させて用いることで、同質な関係の反復の中に変化が生まれる。(図3)

3-3.ランドマークによる変化の共有

ランドマークによる大きな変化は、「通り」におけるイソロジーの反復にアクセントを与え、多くの人に共有され得るものとなるのではないか。そしてそれは、イソロジーの反復の中に全く異質なものを挿入することで生まれる。例えば中国・ジャオシンでは、切り妻屋根の反復の中で明らかに異なる「塔」のランドマークが、切妻屋根の反復が広がる中にクラスターのような共同の単位を生じている。

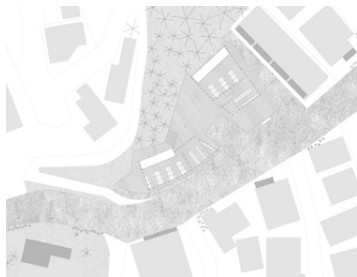


図3.関係の反復と変形



図4.中国、ジャオシン

3-4.イソロジーの反復の限界

イソロジーの反復による「通り」の形成は、主に19世紀末までを中心に行われてきたものであり、都市が多機能化、多文化化によって多様化してきた現在では、イソロジーのみを前提とすることは難しくなっている。現在の都市はヘテロロジー(異質性)、つまり「同じでないこと」も前提にしないと考えることができない。

ヘテロロジーの集合から変化を考えると、そこにイソロジーの反復とは異なる「同質性」を見つけ出さなければならない。ここで、竹山実が記号学によって捉え直したイソロジーとヘテロロジーについて考える。すると、パラダイム体系に属するヘテロロジーになんらかのつながりを見出すためには、コンテクション的記号集合を起こさなければならない。文化や社会、観念など人の主観によってつくられる価値群である。

4.研究2：時間的秩序による経験の反復

4-1.時間軸を取り入れた経験の思考

人の主観的な価値は、それぞれの経験の蓄積によってつくられていく。つまり、時間軸も取り入れて、「通り」の経験を考える必要がある。時間的秩序から見出される「反復」のリズムが、ヘテロロジーの集合の中に反復と変化を見つけ出すのではないかと考える。

4-2.移動による時間の発生と反復

「通り」は必ず「移動する」という道本来の役割を持っている。移動には場所の変化と時間の経過が伴い、空間の経験に時間軸が取り込まれる。そこに、反復と変化、そしてその共有を見出すことができる。

例えば、バラバラの建物でも、それらは元の敷地割などから同じような間隔で並んでいることは多く、そこを歩くと同じ時間、リズムが経験される。そしてその間隔が広くなったり狭くなったりしてリズムが崩れたとき、変化を感じられるのではないか。

4-3.リズムを持つ営みによる反復

もともと周期的反復を持つ営みに同調することで、「通り」に時間的反復を取り入れることができるのではないか。まず、「通り」は生活と密接に関わっているのだから、「日常生活」や「産業のフロー」などを取り入れることができるだろう。また次には、「季節」や祭りなどの「周期的に起こる出来事」なども考えられる。これはより多くの人に共有されたリズムの経験である。

例えば、人の1日の暮らしに合わせて通りに役割を与えたり、植物の成長や遠景を望むときの空気の質、明るさなどから季節を感じさせたりできる。「通り」には多くの人や環境が参加しているのだから、それは1つでなく、複数のリズムを持つと考えられる。

5.考察：「通り」とは何か

これまでの研究より「通り」を次のように定義する。

- i. 物質的、時間的な「反復」を持ち、特に時間についてリズムを持っている
- ii. 反復の中の変化が多様である
- iii. それが多くの人に共有され得る経験となっている

この定義を踏まえて、スタジオで行った3つの設計プロジェクトについて考察する。

6.実践：スタジオプロジェクトから

6-1.藤原スタジオ

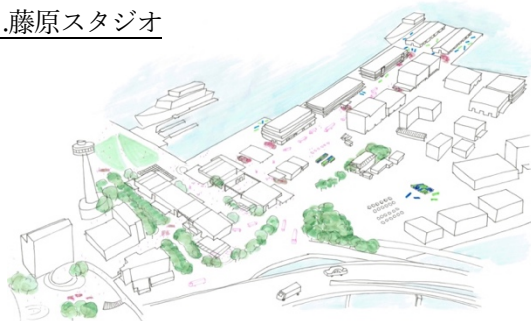


図5.「横浜の辻-人とモノがぶつかり合う創造の場」

横浜の港がかつて持っていた港から内陸に伸びる通りを軸とした限界性を、貿易産業だけでなく観光や創造活動にまで広がった現在の横浜において、創造的な人とモノの活動軸として再考した。そして、山下埠頭の付け根に、その軸と山下公園(市民生活、観光)の辻(交点)となるような新しい倉庫を提案した。

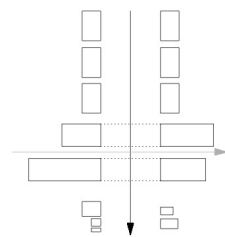


図6.活動軸の概念図

<反復の要素>貿易流通産業のフロー/産業に従事しない市民の日常生活/モノの移動/横浜の様々な祭/既存の倉庫群// 時間的の反復を幾つか取り入れて考えたため、状況

としては多様なものをイメージしたが、物質的な反復が見出せず、既存倉庫群を抜けたところで「通り」性が失われ、状況として描いていたものが設計に反映されずに終わってしまった。また移動が主にモノに限られ、通りは経験でなく補助線になってしまった。

6-2.西沢スタジオ

1.7km 続く尾根道を中心に周辺的环境と人々の暮らしを再編していくことで、多様な地形や多くの人に出会うこと、遠景・中景に広がる風景など尾根道が持つ様々な魅力を再発見し、自分たちの暮らしに誇りや愛



図7.「尾根道に暮らす大きな環境」

着を持つことを目指した。尾根道自体、周辺の建物と空地、サイン計画、手すりや植栽を一体に提案した。

<反復の要素>多様な年代の日常生活/生活に密接した外部空間や遠景を印象

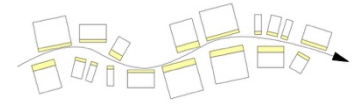


図8.尾根道の概念図

付けることにより感じる季節のリズム/人々の移動/尾根道を全て同じに舗装し、それに対して家々が軒や縁側によって中間領域をもつという関係性/ソリッドの反復に対する「抜け」// 「抜け」という体験の変化はリズムの変化でもあり、その体験とそこに見えるまちの風景をランドマークとし、皆が集まるような場所にすることによって、経験の共有も促すことができたと考える。ここでは建築を全て塊と捉えて抜けをつくらせたり、曲がりくねった尾根道を全て一色に舗装するなど、適度に抽象化をすることで、ヘテロロジーの中にも物質的反復を見出した。しかし、日常以上の大きな物語を感じることはできなかった。



図9.親の生活リズムと子供の生活リズムの重なり

6-3.乾スタジオ

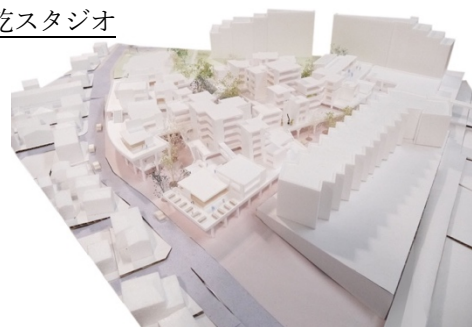


図10.「地域から生まれる暮らしの場」

大高正人の坂出人工土地の再読を通して、幾つかの

都市環境を立体的に重ねることで周辺との連続と開かれているけれど一定の領域が生まれることや、重なった上と下で全く異なる体験が作られる面白さを学んだ。そして長津田において、緩やかな斜面に大きな空間がある自然土地と、造成のような段差の上に人間スケールのユニットが反復する人工土地を重ね、「地域に暮らし続けるための中心となるような病院」を提案した。

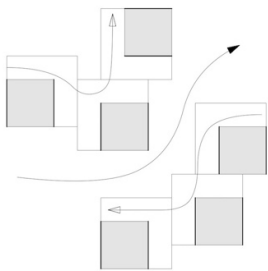


図 11. 中の道の概念図

<反復の要素>室と中間領域を持つユニット// 奥行き深い建築において、「通り」を建築が内包することで、その経験の実現を目指した。特に人工土地の上において、反復したユニットを人工土地が持つ歪んだ構造グリッドや段差に合わせて変形して

いくことで、変化をつくっている。また大きな変化として、時折人工土地の下の伸びやかな斜面が覗き込めるようになっていく。時間軸を取り入れることができなかつたため不十分ではあったが、「通り」を反復や変化など抽象化した要点を押さえて街路のように広がりをもって編み込むことで、全体を「通り」の経験として考えることができると感じられた。

7. 考察と結論

7-1. 実践からの考察

3つの実践を通して「通り」の経験を考えるためには「時間を伴う経験の反復と変化」を捉えた上で、それをなんらかの物質的な反復に反映させることが必要だと考えられる。そのどちらかがないと、虚構の世界に終わるか、あるいはただの path になる。特に新しくつくられる建築はそれ自体にまだリズムを持たないため、時間を考えることが重要になる。また西沢スタジオの「家々と尾根道の関係性の反復」と「それらをソリッドなものの反復としてみたときの'抜け'という変化の挿入」のように、様々な周期の反復を重ねることが重要だと考えられる。異なる周期の反復の重ね合わせは、波の合成のようにそれぞれの違い以上の多様性を生む。そのために、時間を伴った思考の必要がある。

7-2. 時間を捉える思考方法

多くは「変わらないもの」として考えられてきた建

築の表現手法では、時間を伴う経験を考えることは難しい。新しい思考方法を模索する必要がある。

例えば、藤原スタジオでは『異時同図法』のような表現を使って、モノが海からやってきて、人の手によって作りかえられながら集まったり出て行ったりする時間の流れをスケッチするスタディをした。

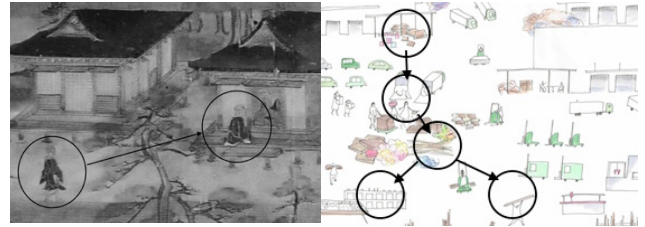


図 12. 一遍上人絵伝、移動前後の一遍上人/図 13. 藤原スタジオ、スケッチ

西沢スタジオでは、尾根道を歩いている自分の目線で連続した 30 枚のパースを描き、移動とその時間を含んだ体験をスタディした。



図 14. 西沢スタジオ、連続パーサによるスタディ

7-3. 結論

「通り」の経験を共有するための考えを、以下のよう

- i. 時間的な反復を見つけ出し、物質的に応じる
- ii. 抽象化の度合いを調整して、ヘテロロジーの中にも物質的な反復を見出す
- iii. 様々な周期の反復が重なるようにする、そこに生まれる変化の強弱を少人数や大人数で共有する
- iv. 時間を取り入れた思考方法を用いる

このように、時間を伴う反復から「通り」の経験を考えることで、まちや産業がもつ歴史や尾根道を中心とする丘全体のように、さらに大きく力強い一体感をつくる可能性も感じた。そこで人は、自らが1つの場面として参加しながら、その大きな環境も感じる、豊かな日々の経験を得るだろう。

【参考文献】

- 1) 人間のための街路 B. ルドルフスキー
- 2) 街路の意味 竹山実
- 3) 経験としての建築 S.E. ラスムッセン
- 4) 集落の教え 100 原広司
- 5) コラージュ・シティ コーリン・ロウ
- 6) 世界の村と街シリーズ 二川幸夫